

教師教育における「聞き書き」活動の意義と方法

— 教員養成課程における指導事例の検討 —

田中宏幸

(2009年10月6日受理)

The Significance and Process of “Interview-Report Training” in Teacher Education

Hiroyuki Tanaka

Abstract: Good teachers usually have the ability to establish and maintain good human relationships with students, parents, colleagues and people around them. To acquire this ability, “interview-report training” is very useful and effective; students go into the local community to interview different people, then write what they have learned and what they think in a report. This training has four good points: meeting people of different generations, reflecting on one’s idea of a career, improving writing ability, and nurturing media literacy. This paper explains the significance and process of the training. Over 12 years, as many as 466 students took a course based on such training, and about 100 of them became junior and senior high school teachers. Of these, 28 practicing teachers participated in the study and commented on the value of the course.

Key words: interview-report, human relationships, ideas of a career, writing ability, media literacy

キーワード：インタビュー、人間関係形成力、職業観、文章表現力、メディア・リテラシー

はじめに

教師には、教職に関する専門知識、教科内容に関する専門知識、指導方法に関する知見と実践力が求められるが、その根底には、生徒や同僚や保護者等と豊かな人間関係を形成する力がなければならない。この最も基本的な人間関係形成力を伸ばしていくにはどうすればよいか。その方法の一つとして、「聞き書き」（インタビュー活動）に注目したい。本稿では、教員養成課程における指導事例をもとに、その意義と方法について考察する。

1. 指導事例

(1) 事例の概要

稿者は、かつて勤務していたノートルダム清心女子大学文学部国語国文学科（後に日本語日本文学科と名称変更）において、13年間（1996～2008年度）にわたって「聞き書き」活動に取り組ませてきた。当大学では、3年対象の学科科目「国語表現法」（後に「日本語表現法」と名称変更）を教職必修科目に指定していたが、その授業内容の一つとして取り入れたものである。

本科目受講生の約9割が教職課程履修者であり、約3割が卒業後、教職（期限付き採用を含む）に従事している。こうした進路状況もあって、教員養成に直結した授業内容として位置づけたものである。

その成果は、以下の「聞き書き集」12冊（総1,614頁）にまとめることができた。（2004年度は稿者が内地留学中のために発行せず、2005年度との合冊版とした。総作品数計466編である。）

| | |
|------------------------------------|-----|
| 第1集「働く人々の姿と心」(1996年度) | 55編 |
| 第2集「働く人々の心」(1997年度) | 58編 |
| 第3集「人生の岐路に学ぶ」(1998年度) | 32編 |
| 第4集「語る」(1999年度) | 24編 |
| 第5集「年輪」(2000年度) | 45編 |
| 第6集「岐路」(2001年度) | 39編 |
| 第7集「この人に聞きたい」(2002年度) | 35編 |
| 第8集「迷インタビューア」(2003年度) | 30編 |
| 第9集「竹のことは竹に聞け」 (2004・2005年度合冊版) | 67編 |
| 第10集「言葉はこころ」(2006年度) | 28編 |
| 第11集「言葉がつなぐ」(2007年度) | 32編 |
| 第12集「縁(えにし)」(2008年度) | 21編 |

このタイトルからも推察できるように、第2集までは、「仕事の話」を聞き出すことを中心テーマとしている。第3集以降は「人生の岐路」に改めて、個々人の歴史を聞き出すことに力を入れ、内容的広がりをもたせるようにしている。第7集以降は、同様のテーマでありながら、インタビュー時における対話に重点を置いたものとなっている。このように、少しずつ色合いを変えてはいるが、全体を貫くのは、他者をより深く理解することであり、一つのこと打ち込んできた市井の人々の歩みを記録することである。

(2) 指導過程

「国語表現法」の年間カリキュラムにおいては、前期に文章表現、後期に音声言語表現を配してきた。「聞き書き」は、その両者を接続するものとして位置づけられる。(次表は、2008年度の例。)

| 実施月 | 内容(丸数字は授業内に実施したもの) |
|------|---|
| 7月 | ①聞き書きの意義と方法(講義) ②学生の相互インタビューと文章化 ③ゲストティーチャー(新聞記者)の講義と模擬インタビュー |
| 8-9月 | インタビュー活動(休暇中の課題) |
| 10月 | 「聞き書き原稿」(デジタルデータ)の提出、「聞き書き集」の第1次編集 |
| 11月 | ④原稿の相互批評と推敲作業 |
| 12月 | 「聞き書き集」の第2次編集 |
| 2月 | 「聞き書き集」の発行 インタビュー対象者への冊子謹呈 |

指導過程は次の通りである。

①聞き書きの意義と方法(講義)

7月上旬、前年度の『聞き書き集』や先行実践例を見せながら、聞き書きに取り組む意義と方法について講義し、学習への意欲づけを図る。前年度の『聞き書き集』は、到達目標を具体的に示したモデルとなる。

②学生の相互インタビューと文章化

翌週、学生間でペアを作らせ、相互インタビューを体験させ、朝日新聞「ひと」欄に似た紹介記事にまとめさせる。テーマは「今、熱中していること」である。指導手順としては、次の点に留意する。(ア)簡単な自己紹介カードを書き、その情報を交換して、質問項目を考える。(イ)一問一答式でなく、答えの中から質問を見つけるようにする。(ウ)「ひと」欄によく用いられる文章構成(現在→過去→未来)を分析し、活用する。この構成は、自ずから個々の歴史を探らせることになり、深みのある内容となりやすい。(エ)会話の引用に工夫を凝らす。(オ)取材内容をもとに600字程度のインタビュー記事にまとめる。(カ)書き上げた記事をコピーして、相手に進呈する。

③ゲストティーチャーの講義と模擬インタビュー

翌々週、地元新聞の記者をゲストに迎え、取材体験(どのようにして真実を聞き出したか、文章化する際にどのような点に留意したか。)を語ってもらう。その話の中から質問事項を見つけ出し、新聞記者に模擬インタビューを行うのである。

例えば、2007年度の影山美幸社会部記者は、不登校経験者への取材体験とその時の記事とを材料にして、「質問する言葉よりも、雰囲気を作ること」「最初に自分のことを語り、取材の意図を理解してもらうこと」「言葉のキャッチボールを意識し、自分が理解したことを相手に伝えること」「その人が本当に言いたいことは何かと心を寄せること」などを語ってくれた。

2008年度の平井美佳文化家庭部記者は、末期癌患者の在宅ケアを経験した家庭に寄り添って長期取材した話や、松山千春(歌手)から予定時間を大幅に超過して取材することができた体験をもとに、人が本音を語り出すのはどういときかを伝えてくれた。前者の場合は、夫婦のなれそめを切り口とすることによって辛い思い出も語ってくれたという話であり、後者の場合は、父親の仕事の話の切り口とすることによって本人の思いも聞き出すことができたという話であった。

学生たちは、この講話と記者への模擬インタビューを通じて、事前調査の重要性を確認するとともに、大切なのは熱意と誠実さだということを実感していく。また、書き手の思い入れが強すぎると、読み手には却って鼻白む文章になりやすいという表現上の心得をも学び取っていく。「聞き手とゲストの双方の力で一つの記事が生まれる。だからこそ、常に自分の感性が問われる」ということを学び取っていくのである。

④原稿の相互批評と推敲作業

夏休み期間を利用して各地で取材し、4,000~5,000字程度にまとめた原稿を、授業担当者が編集する。そ

の初校を相互に読み合い、わかりにくい点などを指摘し合う。さらに各自で補筆作業を行い、完成稿とする。読者意識をもって書く姿勢を高め、読み手に伝わる文章に仕上げていくのである。

2. 指導上の課題に関する考察

(1) 何を聞くか

「聞き書き」活動を課す際に、まず考えなければならないのはテーマである。

「聞き書き」としては、戦争体験、被爆体験、震災体験、被差別体験、炭鉱労働者の実態、水俣病の実態、松本サリン事件の証言など、貴重な取り組みがたくさんある。これらは、それぞれの出来事を風化させないためにも、地道に継続していくべきものである。だが、取材対象者が限られるために、学校という場で、同時期に全員に課すには適さない。また、社会科学習の色合いが強くなりすぎるきらいもある。

先行事例ではこの問題をどのように考えているか。

高校国語科教諭藤本英二（1988）は、「仕事」をテーマに据えている。大学生に取り組みさせた立花隆は、「二十歳のころ」をテーマとしている。

藤本（2002）は、「仕事の話は、高校生にとって潜在的な興味・関心事でありながら、まだまだ彼らの耳目に触れる機会が少ない。単なる職業案内や就職情報、あるいは一般的な労働問題ではなく、具体的な労働現場の実態、そこで働く人々の日常や喜怒哀楽、そのようなものこそが大切なのだと思っていた。そして今ふりかえてみれば、このテーマ設定が聞き書き作品の豊かな実りをもたらしたのだといえる。」（pp.6-7）と語る。「国語表現」の学習を、職業観向上の一つの手立てとしても生かそうとするのである。

一方、立花隆（1998）は、「やってみると、これは実にいいテーマの選択だったと思う。やっぱり「二十歳のころ」というのは、どの人にとっても、その人の人生が、不定形の可能性のかたまりから、ある形をなしていく過程での最もクリティカルな時期なのである。取材で出てきた話を聞いてみて、その人のその後の人生を考えあわせると、なるほど背景にそういう流れがあったのかと合点することが多かった。取材した学生たちも、自分たち自身が二十歳前後で、今まさにそういうクリティカルな時期にいただけに、学ぶことが多かったようだ。おそらく彼らの教養学部時代における最高の勉強になったのではないだろうか。」（p.17）と述べている。生き方・在り方に関する教育の一つとして生かそうとしているのである。

テーマ設定上の留意点として、両者に共通している

のは、①人としての生き方・在り方に関わるものであること、②学習者の視野を大きく広げてくれるものであること、③学習者が抱えている問題に具体的に迫りうるものであること、である。

こうした考え方に学ぶならば、「国語表現法」の課題としては、誰でも取り組める身近な問題であり、なおかつ深まりを持ちうるものでなければならない。それで、この授業においても、「仕事」や「人生の岐路」を中心テーマに据えることにした。

(2) 誰に聞くか

テーマが「仕事」「人生の岐路」ということになれば、インタビュー対象者は必ずから中高年の方となり、地域で活躍している方となる。異世代の方との対話を充実させ、仕事にける思いを聞き出してくることは、決してたやすいことではない。しかし、だからこそ取り組み意義が高まってくると言える。

初対面の方とは話がしにくいという学習者は、両親や祖父母に取材してもよいであろう。家族間で人生について語り合うということは滅多にないことだ。課題が与えられたことを契機として、日頃話せないことが語られるとすれば、一石二鳥というものである。

とはいえ、年齢の下限を設けることは難しい。何歳であれ、ひとつのことに打ち込んでいる人、是非取材したいという思いに駆られる人ならば、誰でもよいとするのが実際的であると言える。

(3) どう聞くか

インタビュー時における留意点は何か。

藤本（1988）は、独り語り式にまとめられた『日本人の仕事』（鎌田慧編、1986）をテキストにして、インタビュアーはどこでどんな質問をしたのかを推理させた上で、次のような注意を与えている。「職業観や人生観を聞き出すことはむずかしい。あなたの職業観は何ですか、といきなり尋ねても普通の人はすぐには口にできぬものだし、無理に答えようとすると抽象的で上滑りなものになったり、ありきたりの表現になりがち。（中略）インタビューで大切なのは、具体的な話の中から自然とその人の物の見方や感じ方がにじみ出てくるようにもっていくことだ。その人の職業観や人生観をさぐりあてるためには、むしろ具体的な質問をいくつも積みかさねていくことが必要だ。」（p.18）

NHK日本語センター（1992）は、「相手の話の中から質問を考える」ことを重視し、「相手が答えている間に次の質問を考えたり、ただ単に質問項目を羅列したりするのではなく、気軽な気持ちで臨んでみたらどうなるでしょうか。そのためには、なぜそうなのか、その時どうしたのか、それはどういうことなのか、という姿勢を絶えず持つことが聞き手としてどうしても

必要になってきます。」と注意を促している。漫然と総花的に話を聞く「露天掘り型」の質問ではなく、相手の話の中から価値ある話題を発見しその内容を深く探り取る「油田掘り型」のきき方を勧めるのである。

立花(1998)は「取材の極意／質問」として、〈〇今の自分の状況と比べながら質問を考える。／〇これだけは訊く」「整理した項目は全部訊く」とかに拘らない。(良好な雰囲気の中で聞けた話が「いい話」である。)／〇臨機応変で質問を考える。(意外な質問で意表を突くのも有効。)／〇「二十歳の誕生日、何をしていましたか?」は結構有効。／〇二十歳当時の相手の姿を想像して、ディテールを補う質問をする。(原稿化で生きてくる。)／〇「二十歳」に拘るあまり、他の重要な話を聞き逃さない。(同書表紙カバー)の六項目を挙げている。

塩野米松(西岡常一『木のいのち木のこころ』の聞き書き者)は、「聞き書き甲子園」という高校生対象の行事において、次のように助言している。「取材ではだいたい相手と自分の話す分量が半々だから、自分という人間をわかってもらうように話さない相手も話してくれません。話すことを用意したほうがいいよ。(中略)とにかく具体的に話を聞くんだよ。人の人生はディテールにこそおもしろさがあるんだからね。」(糸井重里との対談における発言, 2005)

これらを集約すれば、次の6点に整理できる。

- (ア) 具体的なことを丁寧に訊く。仕事の実際の手順や内容をこまかく聞いていくうちに、その人の仕事への思い、気持ち、人生にかける思い、生きることへの思いが滲み出てくる。そこをうまくキャッチする。
- (イ) 質問は小さなこと、相手が気楽に答えられることから始める。
- (ウ) 慣れてきたら、核心に迫る話題に入る。できるだけその人の気持ちや考え方を具体的に聞き出す。
- (エ) 小問切れの質問を続けるのではなく、相手の話の中から次の質問の手がかりを見つける。相手の話にひたすら耳を傾ける。
- (オ) 親しい人ならプライベートなこともきかせてもらう。会話が弾んでぼろりと本音が出たり、新事実が発見できたりする。テープを止めてから面白い話が引き出せることも多い。(テープだけに頼らず、メモすることが大事。)
- (カ) ゲストが複数の場合(座談会)は、話題が思わぬ方向に発展していく意外性を持っている。それが座談会の魅力でもある。原稿化するときには思い切って再構成することにして、脱線覚悟、

重複覚悟で話を聞きだすことに集中する。

(4) どう文章化するか

インタビュー記事のまとめ方としては、三種類が想定される。(参考:下橋, 1998)

①独り語り式(monologue型)

インタビュアーの姿を完全に消し、簡単な経歴のあとは全て相手の語りでおおしていくタイプ。(これはテープがとれた人、ないしは詳しくメモ書きできた人に適する。)この方法の長所としては、「語り手になりかわって、文章化していくので、語り手に同化しやすい。また、その人の口調を生かした文章にしやすい。」という点が挙げられる。

だが、テープをそのままおこしたのでは原稿にならないから、話を再構成し、補足説明を加えて、前後のつながりがわかるようにすることが必要となる。

②対談再現式(Q&A型)

インタビュアーである記者と相手が一問一答式に話を進めていき、それを忠実に再現していくタイプ。この方法は、お互いの立場が明確になり、インタビューの実際を再現しやすいという長所を有する。座談会記録などで採用する方法である。

だが、聞き手が前面に出過ぎるきらいがある。一問一答式で、山場がどこかわかりにくくなる恐れもある。

③探訪記式(reportage型)

人選びに至る経過、当日インタビューが始まる前の雰囲気、部屋の様子、相手の第一印象等の描写を詳しく入れていき、その中に聞き出せた内容を展開していくタイプ。インタビュー時間が少なく、あまり内容的に聞き出せなかった場合に生かせる方式である。どういう状況で取材したかが分かりやすい。

だが、外面的なことを説明することに重点が置かれ、内面的なことに迫りにくくなることが多い。

「独り語り式」は、藤本や塩野が用いた方法である。(立花は、限定していない。)稿者自身も、最初のうちは「独り語り式」を強く勧めたが、近年は三方式から選択させるように改めた。録音可能なテープレコーダーを持っている学生が急減したために、メモをもとに書くことができる他の方式も許容せざるを得なかったのである。また、事前指導の相互インタビューで人物紹介記事風にまとめるように求めたために、授業の流れとして、ひとつの表現スタイルに限定しにくくなったという事情もあった。

なお、いずれの方式の場合も、話のまとめりに「小見出し」をつけさせることが重要なポイントとなる。読みやすくするためだけでなく、文章を再構成する際に、内容整理に役立ち、文章構成意識を高めさせることになるからである。

(5) 文集をどう活かすか

事後指導においては、出来上がった「聞き書き集」をどう活かすかという問題がある。作品集の完成をゴールとするのではなく、次のように活用するのである。

一つは、相互批評である。ゲラの段階で感想を交換しあい、校正に反映させる。また、作品集完成後に、印象に残る作品について感想を書かせ、交流することで達成感を高めていく。

二つは、ゲストとの再交流である。完成した文集を長期休暇に入ってから直接届けに行かせる。感謝の意を伝えるとともに、整理しながら尋ねたくなったことについていっそう深く聞き取る契機として生かす。

三つは、次年度へのモデル作品としての活用である。類似のものが出やすくなるというきらいはあるが、モデルがあることによって、さらに質の高いものを書こうという意欲付けにつながるものとなる。

3. 「聞き書き」の実際

(1) 取材対象の業種・職種別傾向

受講生が取材した業種・職種は、文学・医療・看護・伝統工芸・美術・書道・茶華道・製造業・宗教・飲食業・建築業・服飾・教育・語学・行政・福祉・保育・金融・保険・サービス業など、多岐にわたった。10名以上が取材した業種・職種は、次表のとおりである。

| 業種 | 教育 | 86 | 保育 | 18 | スポーツ | 13 |
|----|----|----|------|----|------|----|
| | 飲食 | 40 | 医療 | 17 | 宗教 | 12 |
| 職種 | 福祉 | 22 | 建築建設 | 16 | 看護 | 11 |
| | 芸術 | 21 | 美容 | 15 | 農業漁業 | 11 |
| 別 | 服飾 | 20 | 戦争体験 | 14 | 運輸 | 11 |

教育・保育・福祉・図書館司書を合計すると132名、全体のほぼ3割を占める。受講生の大半が教職課程履修者であるから、中学・高校の教員など学校関係者に取材するのは当然の結果であると言えよう。

それに続いて、飲食・服飾・美容関係が多いのは、女子大学の特性であろうか。アルバイト先の店長に取材したケースが多かった。

この他にも、小説家あさのあつこ氏、詩人首藤三郎氏、元オリンピック選手津田三保子氏など、著名な方が登場して驚かされた。また、視覚障害を持ちつつ大学で福祉情報演習を担当する鍼灸師の体験、昭和天皇の特別機に搭乗した客室乗務員の職業秘話、漁の辛さと喜びを長崎弁で再現した聞き書きなども印象深いものであった。

さらに、「仕事」に限定せず、「人生の岐路」や「二十歳のころ」にもテーマを広げたことによって、戦争体

験を聞いてきたケースも少なくなかった。70代以上の方々にとって、孫の世代に自分の体験を語るまたとない機会となったのである。

(2) 取材対象の年代別・続柄別傾向

年代別では、同年齢の20歳から最高齢95歳まで多岐にわたった。最も多かったのは40代である。その前後の働き盛りの方でほぼ三分の二を占めることになった。異世代、特に親の世代との対話という目的はほぼ果たせたと見えよう。

| | | | | | | |
|-----|-----|------|-------|-----|-----|------|
| 世代別 | 20代 | 87人 | 18.7% | 60代 | 41人 | 8.8% |
| | 30代 | 60人 | 12.9% | 70代 | 29人 | 6.2% |
| | 40代 | 137人 | 29.4% | 80代 | 9人 | 1.9% |
| | 50代 | 102人 | 21.9% | 90代 | 1人 | 0.2% |

続柄別では、次表のようになった。約8割は、家族・親族以外への取材を試みている。この課題を契機として、面識の無かった方に取材を試みた例も少くない。社会的視野を広げることに役立ったと言えよう。

| | | | | | | |
|-----|------|------|-------|------|-----|------|
| 続柄別 | 親族以外 | 370人 | 79.4% | | | |
| | 父母 | 33人 | 7.1% | 兄又は姉 | 11人 | 2.4% |
| | 祖父母 | 25人 | 5.4% | 伯父伯母 | 6人 | 1.3% |

(3) 文体の選択

聞き書き作品（総作品数466編）を、文体別に整理すると、「独り語り式」329編（70.6%）、「対談再現式」135編（29.0%）、「探訪記式」2編（0.4%）となった。ゲストの方の「仕事にかける思い」や「人生の岐路における迷いと決断」は、「独り語り式」の方が印象深く再現できるものであるから、全体から見ると、適当な割合だと言える。しかし、巻ごとに点検すると、その占める割合に極端な変化が見られる。（次表参照）

| 対談式 | 巻 | 数 | 総数 | 比率% | 巻 | 数 | 総数 | 比率% |
|------|---|----|----|------|----|----|----|------|
| の選択者 | 1 | 0 | 55 | 0.0 | 7 | 17 | 35 | 48.6 |
| | 2 | 0 | 58 | 0.0 | 8 | 18 | 30 | 60.0 |
| | 3 | 5 | 32 | 15.6 | 9 | 23 | 67 | 34.3 |
| | 4 | 3 | 24 | 12.5 | 10 | 11 | 28 | 39.3 |
| | 5 | 10 | 45 | 22.2 | 11 | 19 | 32 | 59.4 |
| | 6 | 10 | 39 | 25.6 | 12 | 16 | 21 | 76.2 |

第7巻以降、「対談式」の選択者が急速に増え出し、第12巻に至っては、ほぼ四分の三を占めるまでになってしまったのである。

この原因は、録音機所持者の減少というハード面の変化だけでなく、「インタビュー時の対話」に指導の重点を移していったことにあると考えられる。その結果、受講生たちは、場の雰囲気伝えるには質問内容も書き込む方がよいと判断したのであろう。

また、前年度までの作品をモデルとして提示したことが、その傾向に拍車をかけたのではないかと考えられる。さらに、事前指導において、文体の比較研究に時間を割くゆとりがなくなったことも一因であろう。「聞き書き」の目的を明確にするとともに、作品研究を十分に行うべきであったと反省させられる。

(4) 作品例 (1999年度の場合)

紙数の都合上、教職に関わる作品例を一例だけ挙げる。この学生は、インタビュー終了後、「不安や疑問の多い「教師」という世界に、一つの方向を示してくれる『道しるべ』を作ることができました。」と語っていた。進路選択にも大きな影響を与える活動となった事例である。

「教師とは、人間とは—中学校教師—」(後半部)
1999年度受講生 H・A (岡山)

◇I・N先生

総社市新本出身。昭和28年、教師生活をスタートさせる。数々の中学校で国語科の教師として教壇に立ちながら、生徒指導においても経験豊富。小学校の校長先生として退職後、現在は保育園の園長先生として活躍されている。

《自ら動く生徒指導》

総社の中学校にいたとき、いわゆる非行型の生徒がいてね。いまのように内に秘めてしまう子供たちと違って、昔は倉敷や岡山まで子供たちが出て行って、先生たちがその子たちを探しに見廻りにいったんですよ。夜中12時～1時に岡山の高島屋の前に張り込んで、家出した子を探すんです。そのためにまず、チンピラちゃんと関わりをもって、いろいろ話をするんです。すると何日も続くから「おっちゃんたちも本気じゃのう。」言うんです。そしたら「ひょっとしたら東山のへんにおる、あれかのう？」言うて。警察は絶対見つけださんけど、それはチンピラちゃん知るとるんよ。そして探しに行って連れて帰る。そういう時代もあった。

先生いうのは、子供が悪い事をしててもそれがなんのサインか受け止められる感性があるんよ。子供にはごまかしがきかんからね。彼らはするどい。うわべでしゃべっても、彼らは見抜いている。機嫌をとるような関わり方をすると、絶対信頼してはくれんし、うけつけない。生徒指導で一番大切なのは、どれだけ動けるか、それにかかっている。

動くというのにはいろんな意味があるけど、な

かなか本当は動けないんよ。例えば、子供と家庭の問題について、「(家庭に)どこまで踏み込んでいいのかわかんないの？」なんていうのはきれいなことなんよ。あんまり家庭に入っちゃいけないとかいうけれども、子供は家庭から出てきて、家庭に帰っていくんじゃから。そりゃあ、ずかずか入って行っても困るけど。家庭に入るためには、家庭に入れるだけのアプローチを、時間をかけて父兄としていかんとね。「ああ、(家庭に)そういうことがあったのか。」ということがないと、子供を指導して行くことはできんでしょう。

総社の中学校で教えてもらったんだけど、どんな「やっちゃん」(やくざ)がかった親でも、子供がかわいくない親はおらん。親と話をするときは、子供を据えて話をする。子供が入っていない話はしない。どんな話をするにも、常に子供を据えて話をしたときには、教師と親との間に共通点が生まれて通じるしね。それから「じゃあこの子をどうするか？」ということになる。具体的な話になると親はね、「学校は一方的にいろいろ言うてくるけど、学校の方にも子供に対して配慮がたりん。」いうてくることもある。たしかに筋が通っているときもある。すると教師は、「そりゃあ親にも責任がある。学校ばあじゃあ、どうにもできん。」ということ言う。こういう話になったときには、その話題に子供がいらないでしょう。責任のなすりあい。

こういうときは、お互いの話をきかんといけん。そのためにいっぺん親の意見を受けとめんといけん。「お父さんが言うのもそのとおりで」とね。カウンセリングといっしょ。とにかく一度全部そのままを受け止める。受けとめるだけの懐の深さが必要。そして今度は相手の意見を反芻する。「お父さんは〇〇いわれるんですね？」って。すると「そういうんばあじゃあねえ。」というように当人も気付く。そしてこの子を救うために学校が何をし、家庭に何ができるかを考える。できることとできないことは、学校にも家庭にもあるが、そのところをお互いに分担していったりせんかね。そこまで親と話すには動いてないと、電話だけじゃあどうにもならん。「動けるか」いうのはそういうこと。教師が一方的に授業をしているだけという時代は終わった。そういうふうにも動いてでも対処して行かなければならない子供が多いんよ。そういう子はどの子も同じ「迷える子羊」的存在であって、それが「問題児」というようなレッテルをはられてしまっている。

《同和問題》

君が「同和問題は今でも根強いんですかねえ？」
 というような言い方をするのは、同和の中に君自身
 がいっていないということなんよ。厳しく言
 うと、第三者の立場でしかないから、そういう言
 い方になる。同和問題にしても生徒指導にしても、
 一人の子供が、一人の人間が、どういう生きざま
 ををしてても一つの存在ですからね。そういう目
 で見ていくと、人権一人が人として認められてい
 るかどうかということは、そういう問題が根強く
 残っているかどうかということではないでしょ
 う。女の子でも、女だからといって差別されてい
 るように感じる時があるでしょう。そういう意
 識がある、感じるということは、「あの人は部落
 の人だ。」という見方をするのと同じなんですよ。

同和問題というのは、要は、人権が認められて
 いるかどうか、人が人として認められているか
 ということが基本的なことなんです。そしてそう
 いう事象がまだあれば、これはまだ偏見が残って
 いるということなんです。たいがい個人的にはいい
 が、親や親類がだめだという場合が多いですね。
 だけど、親類と結婚するわけじゃあないんだし。
 結局人が人として生きることが大切であって、ど
 この出身というのは、人柄には関係ないですよ。
 同和問題を知ったときどう対処するか？「寝た子
 は必ず起きる」その時一番支えになるのがな
 にか？それはあくまでその人を人として認めてい
 れば、それで結ばれていけば大丈夫。それがないと
 逆にあわててしまう。大人になって部落出身の人
 に出会ったとき、これが差別かと気づいて立ち向
 かって次の方向へ進んで行けたらいいね。差別問
 題は人が人として生きていけるかの基本問題だ
 から。優れた先生のなかにも、部落出身だとい
 うことを宣言できる人もいれば、できない人も
 いる。しかしそれも本当の人間の姿なんよね。人
 間は弱いものだから、それを支える周囲があっ
 てはじめて告発できる。自分がそういう差別とい
 う問題を受け止めたら、差別は部落差別だけ
 ではないということに気づくはず。自分も差別
 されているということに気付いていないだけ。
 ちっちゃくても差別は差別。「あの子はこう
 タロウ。」と固定観念を持ってしまっている
 のが部落差別です。人は過ちを犯すけど、
 そのことに気づくか、あるいはこれは差別
 だと意識として持てるか持てないかは大き
 いですね。一生人間生きていくなかで、完全
 な人間はいないから。犯した過ちに気づくか
 気づかないかが大切なんですよ。

4. 受講生（卒業生）へのアンケート調査

教職に就いた卒業生は、「聞き書き」活動をどの
 ように受け止めているのであろうか。2009年8月、100
 名に調査用紙を発送して、28名から回答を得た。

| 項目 | 評価 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 平均 |
|--------------|----|----|----|---|---|---|------|
| 職業や仕事の理解 | | 22 | 3 | 3 | 0 | 0 | 4.68 |
| 文章表現力の向上 | | 16 | 12 | 0 | 0 | 0 | 4.57 |
| 異世代との対話 | | 17 | 9 | 1 | 0 | 1 | 4.46 |
| 編集力の向上 | | 13 | 14 | 1 | 0 | 0 | 4.43 |
| メディアリテラシーの向上 | | 6 | 13 | 9 | 0 | 0 | 3.89 |
| 生徒との対話 | | 6 | 12 | 9 | 0 | 1 | 3.79 |

1998年度受講生は、次のように記述している。

大学を卒業して10年が経とうとしていますが、
 「聞き書き」活動は非常に楽しかったし、得るも
 のも大きかったのを今でも覚えています。普段で
 は聞けない話が聞けたこと、面と向かって話をす
 る中で、どんどん話題が広がっていくおもしろさ
 を感じたこと（計画していた質問内容から話がそ
 れたことも事実ですが）、質問の仕方次第で相手
 の反応が変わることなどです。また、文集として
 まとめていただいたため、様々な職業のこと、様々
 な年代の人が考えていることが少なからず理解で
 きたことです。この文集は今でも大切に保管して
 あります。

教職現場で働く中で、この「聞き書き」活動は大
 いに役立っています。学習活動はもちろんのこと、
 生徒や保護者、他教員との関係においてもです。

学習活動では、国語表現の授業で、担任インタ
 ビュー（1対40）を実施しました。最初は乗り気
 でなかった生徒も、インタビューが終わる頃には
 目を輝かせて話を聞いていたのが印象に残って
 います。担任の先生も非常に楽しかったようです。
 「聞き書き」活動は、活動そのものだけでなく、
 事前の準備や事後の処理（時間はかかりますが
 ……）がしっかりできてこそ収穫があると思うの
 で、今後も挑戦していきたい活動の一つです。

また、私は今、教育相談に携わっているので、
 その立場でもこの活動が特に役に立っていると思
 います。生徒や保護者が何を伝えようとしている
 のか、こちらが生徒や保護者に何を伝えたいか、
 そこに至るまでの過程の重要性（たとえば、話を
 聞くときの場所や位置関係、表情、仕草、話の展
 開方法など）などです。人間関係を構築するため
 には、日頃からこの活動がいかにできているかが

大切なのではないかと考えている今日この頃です。(A・M)

この他にも、「言葉に敏感になった」「対話力の向上に役立った」「時や場に応じた話し方ができるようになった」「話の流れや間を大事にすることを意識するようになった」「自分に自信が持てるようになった」という感想が数多く寄せられた。

5. 「聞き書き」の成果と意義

(1) 学生作品の到達点と課題—学習者は何を学んだか

学生たちが、インタビューを終えて最も強く感じるのは、「一人の人生との出会い」である。人生を積み重ねてきた人と、ただか20年しか生きていない自分との差を目の当たりにし、ゲストの方の思いを正面から受け止めたとき、改めて「人間の生の重さ」に気づく。また、ゲストの方の前向きに生きていこうとする姿が、学生に生きる勇気を与えてくれるのである。

学生たちが学び取ってくる第二の点は、「聞くことの重要性」である。テープレコーダーを用意し、録音させてもらった学生は、次のように感想を記している。「その場所では聞いているつもりでも、聞けていないことが多い。再度テープを聞き直す方が、何か伝わるものが多いと思った。大切なところ、言いたいところは何度もくり返していることに気づくし、話の間や、音声の強弱が言葉より別の何かを伝えていることに気づく。これは、文章では分からない事だと思った。」このように、質問することや話を受け止めることの難しさを体験することが、自らの言葉のありようを見つめ直すことにつながってくる。

第三は、「文章化の難しさ」である。「聞き書き」では、聞き取ったことの十分の一も文章化できないことを思い知らされる。どこを選択し、どう整理していくか。人柄が伝わるようにするにはどのような言葉遣いが適当か。この再構成の作業が、学生の思考力を鍛えていく。また、せっかく聞き出した話であっても、秘密にしなければならないことも出てくる。こうした作業を通じて、あらゆる文章の奥に、語られていない部分があることに思い至っていくのである。

(2) 教師教育における位置づけとその効果

以上のような感想も踏まえるならば、教師教育としての「聞き書き」の意義は四点に整理できるであろう。

第一は、仕事観・職業観の向上である。教師となつて生徒たちに適切な進路指導やキャリア教育をするには、自らの仕事観や職業観を豊かなものにしていなければならない。「聞き書き」は、具体的な労働現場の

実態やそこで働く人々の思いに接する学習である。この学習を通じて、社会的な地位や収入だけで価値判断する皮相な職業観から抜け出し、働くことの喜びを伝えられる教師となってくれると期待される。

第二は、生徒や異世代との対話力の向上である。生徒や保護者が何を伝えたいと思っているのかを、しっかりと聞き出し受け止める力が教師には求められる。寡黙な生徒、価値観の異なる保護者と出会うときもある。そのとき、聞き書きを通じて得た「誰もが迷いながら生きており、人との関わりの中で自己存在の意味を確かめているのだ」という認識が生き、共感的な対話ができるようになるであろう。

第三は、文章表現力や編集力の向上である。「聞き書き」で身につける「独り語り式」や「対談再現式」の文体は、通常の見聞文や報告文とは異なる文体である。だが、学校新聞や学級通信を発行するときに大いに生かされることになる。聞き書き内容を再構成したり、見出しをつけて読みやすくしたりして、ひとつの作品として編集していくことは、生徒一人一人の作品を生かしていくことにもつながるに違いない。

第四は、メディア・リテラシーの向上である。「聞き書き」を通じて、聞き取った情報量の十分の一も書けないものだと知ることは、裏返してみれば日頃接している報道記事の陰では計り知れない情報が捨てられていると気づくことに他ならない。取材によって記事をまとめていく新聞記者の立場を経験することが、各自のメディア・リテラシーを向上させていくのである。

6. おわりに

こうした実践を重ねて感じることだが、「聞き書き」というものは、あまり肩肘を張らずに、気軽に始める方がよいようだ。相手を敬う気持ちと、相手の「想い」を知りたいという熱意さえあれば、何とかなる。しかも、始めてしまうと、相手の方の心の豊かさに感動し、ぐいぐいと引き込まれていく。もちろん、たどたどしくてうまくいかない時もあるが、誤解し誤解されながら理解を深めていく経験を重ね、さらにその経験をふりかえり文章化していくことによって、心の「通じ合い」を実感し、他者とともに生きる「言葉の力」が育っていくのである。

教師としての資質を高めるには、豊かな人間理解が根底になければならない。「聞き書き」を通じて多くの異世代の方と出会うことは、保護者や地域の人々との交流を深めることに役立つであろう。また、職業に対する理解を深めることは、生き方を大切にするキャリア教育に欠かせないことである。さらに、対話力や

編集力を高めていくことは、生徒たちとのコミュニケーションを豊かにすることにつながり、学級文集等を編集して積極的に情報発信していく力となっていく。「聞き書き」は、国語科教師に求められる資質が総合的に養える活動だと言えるのである。

【参考文献】

NHK日本語教育センター平成4年度「先生のための話しことばセミナー」資料(1992)

糸井重里「聞き書きの世界—『木のいのち木のころ』と塩野米松さん」

<http://www.1101.com/kikigaki/01-0613.html>

(「ほぼ日刊イトイ新聞」2005年6月13日～24日, 12回

連載)

鎌田慧編『日本人の仕事』(平凡社, 1986)

齋藤 孝『質問力』(筑摩書房, 2003)

下橋邦彦『高校生は表現する』(東方出版, 1996)

下橋邦彦『挑発する教育・格闘する若者』(勉誠出版, 1998)

立花 隆『二十歳のころ』(新潮社, 1998)

永江 朗『インタビュー術』(講談社現代新書, 2002)

西岡常一・塩野米松『木のいのち木のころ』(草思社, 1993)

藤本英二『ことばさがしの旅(下)』(高校出版, 1988)

藤本英二『聞かしてえ～な仕事の話』(青木書店, 2002)

本間徹夫『論理学課題レポート「仕事」の聞き書き』(富良野看護専門学校, 2002)